

ストゥムプの情覺説

野上俊夫

一

複雑にして變轉極りなき精神現象に、何等かの秩序を興へ、何等かの根據によつて之れを分類するのは、極めて困難なることである。かなり古くから行はれ、今も尙ほ普通の人々に信ぜられて居る知情意の三分法は、恐くは種々の精神現象について、其の最も著しい特徴を基として立てられたものであらうが、今から考へて見ても案外に根據の確かな所があるやうに思はれる。然るに近頃は心理學者の中で二分法ともいふべきものを取つて居る人が多い。例へばヴェント^(一)は複雑なる精神作用を二つに大別して表象(Vorstellungen)と感情作用(Gemütsbewegungen)との二つとし、前者は我々の經驗の客觀的方面を表はし、後者はその主觀的方面を表はすとした。而してヴェントは更に之に心理的分析を加へて、所謂『心的要素』といふものを定め、客觀的方面の要素

を感覺と名づけ、主觀的方面のを簡單感情と名けた。リップスも亦之れと同じやうな見方から精神生活を大別して一方に於いては感情を立て、他の一方に於いては之れに對して對象(„das „Gegenständliche“)と對象的經驗(„gegenständliche Erlebnisse“)とを立て、居る。複雑なる精神現象の事はしばらく之れを措いて、精神の最も單一なる要素について考へて見るに、之れを矢張り大體二つのものとして、一方を感覺他方を感情と名けやうといふ考へは、今日の心理學者間に可なり優勢であるやうに思はれる。

然るに實際に具體的の精神要素のものについて、所謂感覺と所謂感情とが相互に如何に異つて居るかを精細に檢する時は、今まで頗る明白であると思はれた兩者の區別が次第に曖昧になつて來る。オルト⁽ⁱⁱⁱ⁾は從來感情の特徴として數へられて居た三つの性質を吟味して居る。第一は感情の主觀性であつて、今述べたるヴントやリップスの考へがそれである。第二は感情の對立性(„Antagonismus“)である。感覺の區別は常に差異(„Unterschied“)であるが感情は快と不快、興奮と沈靜といふが如く常に相對した一對を作る性質を有するといふのである。第三は感情の定位すべからざる性質(„Nichlokalisierbarkeit“)である。感覺はそれが空間の何處にあるかを知り得るが、感情はこれが出來ないといふのである。ティッチナー^(iv)は此の三つの外に更に他の種々な

る學者によりて説かれた他の三つの特徴を數へて之れを吟味して居る。其の第一は中心的強度(central intensity)とも名つくべきものである。これはキェルベの考へであつて、彼れは感覺を周邊より起るものと中樞的に起るものとの二つとして居る。之れは大體に於いて普通の心理學上の用語でいへば感覺と心像とに相當するものであるが、此の兩者を比較すると、普通は周邊より起る感覺は中樞的に起つたものよりも強度が大なるを常とする。然るに之れに伴ふ感情からいへば、前者に伴ふもの必ずしも後者に伴ふものより強くは無い。即ち感覺に於いては中樞的のものが常に弱い、感情に於いては中樞的のものも可なりに強い事があるといふ點で、感覺と感情とを區別せんとするのである。第二は感覺は長い時間之れを感じて居ても別に大なる變化は無いが、感情は少し長く感じて居れば之れに慣れて(Habituation)餘り多くそれを感じなくなるといふ點で兩者を別たうとする。第三は感情は明晰といふ屬性を缺いて居る(Lack of clearness)といふのである。即ち感覺は之れに注意すれば益明かに意識せられるに反して、感情は之れに注意を向けることは不可能で、注意を向けんとするれば、其の感情は容易く消え去らんとするといふのである。

一 Wundt, Grundzüge der physiologischen Psychologie, 6te Aufl. I Bd. S. 404--

- 一) Th. Lipps, Fühlen, Wollen und Denken, 1902, S. 1-
- 二) J. Orth, Gefühl und Bewusstseinslage, 1903 S. 20--
- 三) E. B. Titchener, The Psychology of Feeling and Attention, 1908, pp 61--
- 四) O. Külpe, Outlines of Psychology, Engl. trans.

II

此くの如く、感情が感覺と異つて居る所の特徴について、種々の學者の考へて居ることを列擧して見ると、先づ上の六つが主要なるものであるとなし得やうが、併し此の六つの特徴を稍精密に吟味して見ると、多くは頗る曖昧なる特徴に過ぎないやうに思はれ、感覺と感情との區別は、在來普通に考へられて居たやうに明白なものではないやうに思はれて來るのである。こゝには此れ等の一々の點について詳論するの暇を有たないが、極めて大略に其の難點を數へて見やう。

第一に感情の主觀性といふこと、即ち感覺は客觀的であるに對して、感情は主觀的であるといふことは、之れを心理學的に云へば如何なる意味であるか。テイッチナー(六)は之れに三つの解釋が可能であるとして居る。其の一は融合せんとする傾向がある。即ち感情は同時に存在するものが常に相融合して一つの統一的のものとなら

んとする傾向がある。感覺はそれが無いといふのである。併し感覺の中でも有機感覺の如きは融合せんとする傾向を有して居るといへるから、此の解釋には困難がある。其の二は感覺は如何なる個人にも同じやうに感ぜらるゝが、感情は個人によりて異るといふのである。赤い色は何人にも赤く見えるが、同一の物が甲には快に乙には不快に見えることもあり得るといふやうなことをいふのである。併し感覺中でも溫度感覺の如きは個人差が多いやうである。同じく溫度六十度の室に入つても、前に五十度の室に居た人には暖く感じ、前に七十度の室に居た人には冷かに感ずるであらう。其の三は、感情は必ず感覺に伴うて起るが、感覺はそれのみ獨立に起つて、感情を伴はないで居る場合があり得るといふのである。之れは或る心理學者のやうに、感情を以て感覺の屬性として之れを感覺の情調(Dehilston)と名ける考への人に、當然の立場であり、又感情と感覺とを別々の相獨立せる心的要素と認むる人に於いても亦有たれ得る考へである。併しながら之れは決して總ての心理學者の一致した考へでは無い。例へばキェルペの如きは、感情を伴はない感覺が有ると同様に、感覺を伴はない感情もあると云つて居る。自分もやはり此の考へに賛成し度いと思ふものである。此くの如くにして感情の主觀性といふことの三つの意義の

いづれを取るにしても可なりな困難があつて、之れを以て感情の感覺より區別され得べき性質なりとなし得ないやうに思はれる。

第二は感情は常に一對をなす性質を有つて居る。快は不快と相對して居ることはいふに及ばず、ザント其の他の學者のやつて居るやうに感情に他の一つ二つ或は三つの方向があると考へるとしても、矢張り興奮と沈靜と緊張と弛緩と、能動と受動といふ如く常に相反對して居るものがある。感覺には此くの如きことが無い。これが兩者の差異であると考へるのである。併し或る意味からいへば溫度感覺の溫と冷とは反對である。或は此の場合には溫度と冷覺といふ全く相異つた二つの感覺であるとしても、他の一方に於いて感情の中に數へられて居る興奮と沈靜と緊張と弛緩といふことが果して反對であるかと疑問である。テイッチナー^(七)も指摘して居るやうに、ザントは興奮(Erregung)の反對として或る時は禁止(Hemmung)といひ或る時は沈靜(Beruhigung)といひ、或る時は沈鬱(Depression)と云つて居るが、此れ等の三つのものは皆多少相異つて居て、そのいづれも正に興奮の反對であるか否かは甚疑しい。又弛緩は緊張の止んだことで其の反對とは云び難からう。若し之れを反對であるとすれば、快の反對は快の無くなつた無關心(indifference)の状態であり、不快の反對も亦無關心

となるのであらう。即ち感情は悉く相反對する一對をなして居るといふ事は場合によつて云ひ難いことかある。たゞ何人も認めて感情となすに異議の無い快不快に對しては此の標準は比較的無難にあてはまるやうに思へるのである。

第三の特徴として擧げらるゝ點は、感覺は總て空間中(自己の身體をも含めて)の何れかの點にあると感ぜらるゝが、感情は何處にあるかを定めることは出来ないといふにある。それも一應は明かのやうであるが精査すると種々の困難がある。第一に總ての感覺が此の空間中に定位せらるべき性質を有するかといふと、大に異論がある。嗅覺を最もよく研究したナーゲル^(八)は、嗅覺には定位は無いと云つて居る。或は極めて純粹なる單純音を一耳で聞いた時には定位することは出来ないといふ人もある。或はオルト^(九)は有機感覺の中には定位の極めて困難なるものがあると云つて居る。更に反對の方面から云へば、或感情は總て定位し居ざるかといふことも問題になる。ストウムプ^(一〇)は高等感官の感覺に伴ふ快不快は一定の空間的の要素を有すると考へて居る。色や音に伴ふ情は、色や音の中には存在しては居ないが、併し頭の中に擴がつて居る(als im Kopf ausgebreitet)やうに思へるといひ、此の定位は漠然として^(一一)は居るが併し定位たることは失はないと云つて居る。或はストヨルリ^(一二)ングの如きは

氣分の快感(Stimmungslust)と感覺の快感(Empfindungslust)とを分け前者には其の時の全意識内容が關係し後者は其の關係ある感覺のみに結合して居ると云ふて居る。随つて感情には定位は無いといふも敢て萬人に惹く承認されたといふ譯でも無いといはねばならぬ。

第四の特徴は、キユルペの擧げたもので、之れを普通の心理學の言葉で云ひ表はせば、心像は感覺よりも強度は弱いが、心像に伴ふ感情は、感覺に伴ふ感情と強さの相異は無いといふのである。但之れに就ても反對者がある。ラッドは、觀念的の快苦は、之を嚴密なる分量の標準によつて測定すれば、強き感覺によりて起されたる快苦よりも著しく劣つて居るといつて居る。或はストゥムプは心像の感情は通常は感覺の感情よりも弱い、が、心像の感情は容易に感覺の感情に變形する傾きがある。即ち感情の幻覺ともいふべきものである。故に心像の感情の強さが甚強いと思ふ時は、恐らくは感覺の感情になつて居るのであらうと云つて居る。此の點でも少くも學者が皆一致して居るとは云ひ兼ねるのである。

第五に、感情は之れに慣れるに隨つて強度を減ずるといふことは、云ふ迄も無く感覺にも多くの場合に於て見らるゝ。始めの中には極めて明かに感ぜられたる色、味、

香、壓等は馴るゝに随つて次第に感ぜられなくなることは日常周知の事實である。即ち之れは我等の感覺が外界に適應せる現象であつて、感情の場合にも亦一種の適應を生じて次第に強度を減じ、遂には之れを感じなくなるのである。随つて此の點は感覺も感情も共に全く相同じい適應といふ作用に影響せらるゝのである。

第六に、感覺は注意によつて明了になり、感情は反對に不明となり又は消滅するといふことは、ライッチナーなどは、他の特徴に比して最も明かなもので、之れが兩者の區別を立てしむる最有力なる原因なりとして居る。但これが左程判然として居る區別であるかは稍疑はしく、此の點に就いては後に地の事と關聯して説いて見度いからるゝには之れを略する。

兎も角此くの如くに檢査して來ると、今迄の如くに感覺と感情との區別が明了なものであるとして安心して居られなくなつて來た。随つて學者の内には、此の二つを合して全く一つに纏めてしまはうとする試みをやるものが出て來た。ストウムブの情覺(Gefühlsempfindung)の説の如きは其の尤も主なるものである。

六 op. cit. pp 38 ff.

七 op. cit. pp 145 ff.

八 W. Nagel, Handbuch der Physiologie, 3. Bd. 1905, S. 617.

九 J. R. Angell and W. Eise, Psychological Review, vol. 9. 1901.

一〇 op. cit. S. 30.

一一 G. Stumpf, Zeitschrift für Psychologie, 44. Bd. 1906.

一二 G. Störing, Archiv für die gesamte Psychologie, 6. Bd. 1905.

一三 此の考は最初ストムプが一九〇六年四月ウエルツブルゲに於て開かれたる實驗心理學會に於て講演したるものを同年の十二月に稍増補して *Zeits. f. Ps.* 44. Bd に掲載したものである。情覺といふ譯字の妙なことは自分自身も之れを感じないでもないが、元來原語の *Gefühlsempfindung* といふ字がストムプも自ら云つて居るやうにバラドツクスに見えるのであるから其の譯語の奇妙に見えるのも止むを得ない『感情感覺』といふのが文字通りであらうが、それでは何となく『感情』と『感覺』との二つのものを並べいふ時と區別が無くなるやうに見へるから上のやうにつゞめた文字をあてゝ置いた。

三

ストムプは其の議論の冒頭に於いて、自分の論ぜんとする對象の範圍を明確に限定して居る。即ち彼れがこゝに論ぜんとするは、普通に所謂感覺感情(*die sinnliche Gefühle*)といふので、高等なる情緒や情操といふが如きものは一切與らない。多くの學

者は感覺感情が複雑に結合してそれが情緒や情操になるといふやうな考へであるが、ストムプは此の兩者は全く相異つた種類のもので、同時に論ずることは出来ないを見て居る。其の考への穩當なるか否かは別として、彼れが其の考へを徹底的に進めんとして居る點は頗る面白いと思ふ。それで彼れは具體的に自己が感覺感情と稱する所のものを列舉して居る。即ち

一、純身體的なる痛み(reinkörperliche Schmerzen)

二、身體的の快感(das körperliche Wohlgefühl)これには一般的形式のものの特種のものとのを分つ。

三、特殊感官の感覺に結合する所の適不適の感情(Aannehmlichkeit und Unannehmlichkeit)

の三つのものを指すのである。此等のものが結局矢張り感覺の一種として見らるべきであつて、特に感情として感覺に對立せしむる理由を認めないと主張せんとするものが彼れの論文の主旨である。而して彼れは尙ほ其の議論は全然記述的問題についていふのであつて、解剖や生理に關係した事ではなく、直接に意識に表はれたる事のみを論ずるのであり、又發生學的問題とは全然無關係では無いが、此の方面に

は觸れないと斷つて居る。

次に彼れは在來感覺感情の見方が二種類あつたといふことを述べて居る。即ち。

一、感情は感覺の一の屬性(Attribute)要素(Momente)方面(Seiten)又は變化の様式(Veränderungswesen)であると考へるもの。即ち感覺が質、方度、時間及び空間等の屬性を有するが如くに、更に他の情調といふ屬性を有して居り、此の屬性は、他の屬性とは獨立に變化すると考へる説。

二、感覺と對立した一の新しい心的要素(Elemente)状態(Zustände)又は機能(Funktionen)なりとする考へ。

三、感覺感情は全く一種の感覺到過ぎないとする説。

而してストムプは此の第三説を取るのであつて、先づ第一説の不可能なることを説き、次に第二説の無根據なることを説いて、残れる第三説の正しきことを論ぜんとして居る。

第一の考へ、即ち感情は感覺の一つの屬性なりとする説は、ヴントなども前には説いて居たが、其後ヴントは之れを改めて第二説を取るに至つた。此第一説の不可な

ることはキユルベ(一四)によつて明かに論ぜられた。即ちキユルベの曰く、感情を以て感覺の一つの屬性であるとする考へがあるが、事實上我々は感情そのものが亦更に屬性を有して居ることを知つて居る。即ち多くの感情はそれ／＼相異つた性質を有し、又相異つた強度を有して居る。此の點に於いて感覺と何等の差はない。感覺の一屬性たる感情が更に屬性を有することの不都合なるは、丁度感覺の他の屬性たる性質か強度かが更に屬性を有するの不都合なると同じである。

チーエン(一五)は此の論に對して抗議を提出して居る。即ち一つの化學作用(作)へば酸化作用は一定の強度と性質とを有して居て、それが同時に或る光を伴ふことがあり、而して此の光が更に一定の強さを有する事があるではないかといつて居る。併しストムプは之れに答へて、此の場合の屬性といふ意味と感覺の屬性といふ意味とは全く異つて居る。普通にいふ或る事物の屬性といふことは一つの感覺現象であることが多い。例へば花といふ事物の香とか色とかいふ屬性の如き、或は今の例の化學作用に伴ふ光といふ屬性の如き、皆一つの感覺である。随つて此等の感覺が強度や性質の屬性を有し得べきは當然である。故に我等は思考に於いて此等の屬性を取り去つて、而かも其の事物を考へることが出来る。例へば花の香といふものを考

へないでも花は花として具體的に考への中に残つて居る。然るに感覺の屬性といふものは全くその種々の方面又は變化の様式であつて、之れを去つて考へれば同時に其の感覺も考へ得られないものである。例へば強度なき感覺をいふ如きものは考へ得られぬ。チーエンの抗議は此二つの屬性といふ語が意味を混用して居るものであると答へて居る。此の答へは全く正しいと思はれる。

此くの如くにして、感情が感覺の屬性なりとする説は不可能なりとして、残る所は兩者を相獨立したる心的要素なりとするか、或は兩者を相同じ種類のものに見なすかの二つあるのみとなつたが、ストムプは此際に舉證の責任を第二説を主張する人に負はしめた。即ち科學的の經濟原理といふものがあつた、なるべくは物を簡單に考へねばならぬ。感覺と感情との兩者を相異なる種類のものとする人は、之れを分くるに必要なる理由を擧ぐべき責任がある。若しその理由が不充分であれば當然此の二つを別々なものとする必要は無いと論じて居る。而して此の二つを分たんとする論者が擧げて居る理由の中についてストムプは三つを數へて之れを檢查して居る。

其の一は感覺感情なる精神的感情、情緒といふ如きものと似て居る。例へば感覺

的の快樂や苦痛と精神的の快樂苦痛とは性質上相關係して居る。然るに此の高等なる感情例へば嫉妬悲哀等の如きものは感覺では無い。随つて之れと相關聯して居る感覺感情も亦感覺では無い。

第二の理由は、感情は感覺と異つて主觀性を有する。感覺は外物の屬性なりと思はれ、快樂苦痛は我れの内にありと思はるゝ。

其の三の理由は、感情には空間的の定位及び擴がり有して居ない。

以上の三つの理由の中で、ストゥムプは第一のものを最も主要なるものとし、他の二つは第一をたゞ詳しく述べたに過ぎないものと考へて居る。先づ第一の理由について之れを吟味して見るに、高等なる感情情緒の作用が、感覺とは別種なるものであるとするならば、感覺感情も亦高等感情と別種であるとせねばならぬ。後の二つのものを相似たりと思ふのは、言葉を通俗に用ふる時のみである。即通俗にいふ高等感情又は情緒といふものは、之れに伴ひ來る身體的表出をも含めていふ。即ち此の時の高等感情や情緒といふものの中には多くの有機感覺(Organische Empfindungen)や快苦の感覺をも含んで居る。此等の附帶して居る感覺的部分は簡單感情即ちストゥムプの情覺(Empfindung)に似て居るのであるが、高等感情や情緒などの心理的の中核は決して感覺感情に歸せしむべきも

のでは無い。快や痛の感覺が高等なる感情に似て居るのは即ち部分が全體に似ることである。恰かも一つの複合音を形づくつて居る單純音や噪音の要素が全體の複合音に似るが如きものである。併し其の爲めに決して其れ等各部分が相互に似て居る必要はない。即ち一つの複合音を作れる單純音と噪音とが相似るの要はない。それと同様に通俗の意味でいふ高等感情の中核は、決して快や苦の感覺と同じものではない。

感情を感覺と分つ第二の理由は感情の主觀性を有すといふことである。此の事については自分は前に既に一通り述べて置いたのであるが、ストゥムプの此の理由に對する批評は稍それとは別の方面から論じてあるが、ストゥムプは最初にこゝでは認識論的の議論は避けて通常我等の意識にあらはれることについて論ずるとし、偕て感覺が普通に、外物に在ると思ひ、感情は我れの内にありと思ふのは誤りであると説いて居る。例へば或る食物を鼻や口に持つて行かずとも、それ自身に香ひ味が有るかと思ふならば、然らずと答へなければならぬ。砂糖が甘いといふことは、砂糖が甘く感ずるといふことである。苦や快も同じ事で、熱過ぎる煖爐は不快で、冷き葡萄酒は快であるといふのは、煖爐が熱く、葡萄酒が冷いといふことと同じ意味である。決

して一方を主觀的、他方を客觀的といふやうに分けるべき理由は無い。

加之今我々が論じて居るのは精神生活の要素についてである。未だ我れと外界などの區別の出来ない時の事を論じて居るのである。例へば色をたゞ色とし、痛をたゞ痛として、其の内的の特殊性質のみによつて記載すべきで、經驗の共働によつて此等の現象に與へらるゝ解釋などを考ふべきでは無い。故に百歩を譲つて假りに主觀性と客觀性とを以て感情と感覺との區別が出来るとしても、之れを精神生活の要素に持つて來べきではない。

併し亦一方から考へると、我れと外界との間に對立が將來次第に發育して來るといふのは、何等かの根本的の對立が始めから有つたのでは無いか、そしてそれが感情對感覺の内に存して居たのではないかと疑はれる。勿論自我といふものに就いては感覺感情は頗る大切なものであるが、併し自分のみ單獨に働くに非ずして、興味、高等感情、慾望、運動などが之れに結合して始めてそれが出来るのである。此れ等の結合が經驗せられて後に始めて感覺感情が我等の人格を形づくれる結合體の中核として特殊の地位を占むるに至るのである。故に情覺が我れと外界との差別をなすものでは無いが、此の差別が出來上つて後には外界に對する認識又は行爲に於い

ては、他の感覺と異つた特殊の役目をするのである。即ち他の感覺は大體に於いて外物の性質を吾人に知らしめるが、快苦の感覺は之れに反して此くの如きことをせぬ、或はたゞ外物が我れの身體に對して有用なるか有害なるかを吾人に知らしめるといふ意味に於いてのみ之れをやるのである。即ち此の兩者の間に目的論的若しくは生物學的の差あることを敢て拒まんとするのでは無いが、此の差はその機能又は意義に存して居て、其の物それ自身に存しては居ないことを知らねばならぬ。

第三の理由、即ち感覺には空間性を有して居ないといふ考へについてのストゥムプの吟味は、大體前に述べて置いたことと同じである。即ち感覺が必しも悉く空間性を有するものでないことを、ナトゲルの嗅覺の例などを引いて説いて居る。然るにストゥムプは其の次に感覺にも亦空間性を有して居ることの例として痛覺を擧げて居る。即ち我等は自ら身體の何れの部分が痛いかといふことを多くの場合に於いて頗る精密に知り得ることを述べて居る。然るに今日に於いては何人も痛覺の一つの感覺であることを疑ふものは無く、痛覺と感覺とを分ける人でも痛覺とするには異議は無い。故に此の場合にストゥムプが痛覺に空間性の有することを説いて來たのは聊か不適當の感を免れないが、併し彼れは痛覺をも彼れの所謂情覺の内に容れ

て居るのであるから、かく論ずるのは彼れとしては當然であらう。次ぎに彼れは快の感覺も亦同様に擴がりのみならず定位をも有して居ると云つて居る。但此の場合に於いても、彼れの所謂快の感覺とは、普通にいふ快の感情とは頗る異つたもので、癢痒カユイグスツツグイ、癢笑カユイグスツツグイ其の他の何人にも感覺たることを疑はれないやうなものを指すのである。

ストウムプは更に進んで、快苦以外の感覺感情も同様であると説き、色や音に附加して來る適不適の感情も、或る種類の空間的性質を有つて居ると説き、前に述べた如く、色の快感は頭の中に擴がつて居るやうに見えるといふやうなことを説いた。

然るに之れに反して高等感情又は情緒は少しも空間的性質を有つて居ない。同情、悲哀などは擴がりを有つて居るとは思へない。即ち高等感情と感覺感情とは全然別物とせねばならない。

ストウムプは此くの如くに論じ來つて、感情と感覺とを別つ三つの理由を吟味して、其のいづれも不十分なることを論じ、隨つて感情と感覺との間に特に之れを分つべき理由なしとすれば、當然此の三つは同一部類の中に入るべきであると結んで居る。

一四 op. cit.

一五 Ziehen, Leitfaden der Physiologischen Psychologie, 7to. Aufl. S. 163.

一六 ストムブは快といふものを矢張り感覺の中に入れて居る。これは後に詳論する。

九

以上はストムブの考への消極的の方面であるが、彼れは更に進んで積極的の方面から議論を立て、居る。即ち彼れは彼れの擧げたる三種類の事項について、それが感覺といふ特別のものとするべきで無く、矢張り他の感覺と同様な感覺に過ぎないと論じて居る。

彼れは先づ感覺的の痛み及び感覺的の快が少しく著しきものがあれば、殆ど常に之れに吾人の一種の感情的態度を生ずることを述べて居る。此感情的態度は即ち受容及び拒斥(Annehmen oder Ablehnen)と向けらるゝもので、更に進めば追求及び逃避(suchen u. Fliehen)或は愛憎(Liebe und Hass)となる。然れども快と苦とは決して受容及び拒斥そのものでは無い。たゞその第一の動機にして同時に對象である。併し兎も角も感覺的の痛と快とは所謂狹義の感情と頗る密接に關係して居り、たゞに此等

の痛と快とに殆ど必ず感情が伴ふのみならず、反對に又強き感情があれば、之れに伴ふ運動若しくは有機的變化の爲めに、常に感覺的の痛み又は快の感情を伴ひ生ずる。此の如く痛と快とは感情と密接なる關係があるが故に、之れを特に情覺と名くるのは正當である。併しながら純感覺的範圍に於いて吾人が痛又は快と名くる所のものは、其の性質上飽くまで純粹の感覺であることを忘れてはならぬ。嗅覺、色彩感覺、音の感覺に伴ふ感情と普通に稱せらるゝものは、此等の感覺に伴ふ第二の感覺である。

或は次ぎの如くいふ人もあるかも知れぬ。即ち『痛』といふ語は、同時に此の感覺及び拒斥の態度とを兼ね意味するもので、從來も決して其の根本たる感覺の有ることを否定したものはないと。なる程之れは事實であるが、併し其の時は、其の根本たる感覺それ自身は無痛なるものと考へられ、痛が痛となるが爲めには、更に此の他に感情といふものが機能的作用として又は全く他種の心的要素として附加するを要するといふ風に考へられた。然れどもストップの考によれば所謂痛及び快の情は、それ自身感覺の性質であつて、痛と快との性質は其の根本にある感覺に於いて既に完全に備はつて居るのである。故に若し假りにこゝに一つの生物があつて、單に感覺の

みを感じるを得て、狹義の知的又は情的の機能を有たなかつたとしても、此くの如き生物は、觸覺、嗅覺、溫度感覺など、同時に亦痛と快とを感じ得るであらう。而して亦之れによりてその運動を支配されるであらう。現在の最下等の動物は或は此くの如きのもであらう。

但此くの如くにすれば亦言葉の上に種々の困難も起つて來るかも知れぬ。例へば心理學者と雖も尙ほ『痛』といふ語を時々感情の意味で用ふる『心痛』悲哀の意味でことを禁じ得まい。又痛と正反對の感覺を表はす言語は今現に存在して居ない。何等の説明なしに『快』といへば常に感情の意義となるのである。此くの如き次第であるから、ストッププは次ぎの如き約束をしたらよからうと述べて居る。即ち單に感情(Gefühl)といへば専ら高等なる感情(Gemütsbewegungen)の方面をさすことにし、快と不快(Lust—Unlust)或は喜びと悲み(Freude—Trauer)も同様に情的方面をあらはすとし、情覺の方は之れを感情と名けず、感覺と名づけ、Schmerz, Unannehmlichkeit, Unbehagen等に對するに Wollust, Wohlsein, Lustempfindung, Annehmlichkeit, Behagen 等の文字を以てしたらよからう。又所謂情覺の再生したものを表はすとすれば Gefühlsvorstellungといふ字が考へられるが、之れは高等なる感情即ち喜びや悲みなどの表象を指すことにも用ひら

るゝから、之れと區別するため、情覺表象 (Gefühlsinnesvorstellung) 又は情調表象 (Gefühls-tonvorstellung) としふ字を用ひたらよからうと云つて居る。

五

痛覺に關しては、第一に外皮の刺戟によつて生ずるものは、既に一八八二年にブリックス (Brix) 一八八四年にゴールドシャイデル (Goldschneider) が所謂痛點を發見し、其後フォン、フライ (v. Frey) が更に精密に實驗して、何等壓覺を伴はざる純粹の痛覺あることを證明し、こゝに痛覺の獨立せる感覺なることが一般に認めらるゝに至つた。或は病的狀態特に羸削 (Tabes) などの時に見らるゝ如く、針を以て皮膚を刺すと、初に壓覺のみあつて、その後可なり長き時間を隔て、痛覺が生ずることなどから考へても、又日常生活に於いても、之れと同様に觸接又は溫度の感覺に著しく後れて痛覺が來ることが考へても、痛覺が一つの獨立せる感覺なることを知り得る。

トゥンベルグ (Thunberg) は矢張り痛覺を一つの感覺として認めるが、彼れは其の屬性に質、強度及び局標 (Lokalzeichen) の外に情調といふ屬性を有すとせるは、ストゥムプの與する能はざる所である。痛覺の性質は痛いのであつて、之れは如何ともすることが

出來ぬ。間々愉快なる痛みといふことを云ふが、それはたゞ或る廣い皮膚の表面の中に、同時に或る所では痛覺が生じて居り、他の所では快の感覺が生じて居るものとしか解することは出來ない。或は禁欲者流や殉教者などが、苦痛を喜んで受けることとや甚しきに至つては苦痛から非常に歡喜が生ずる(Vollust der Schmerzen)などといふのは即ち一定の觀念又は確信に基く情緒を指していふので、痛覺の情調が變化して快となつたのでは無い。即ち知的大歡喜の爲めに痛みは或る度まで意識されて居ても、其の個人の精神的及身體的態度に影響を及ぼさないやうになるか(非常なる齒痛をも意志の力によつて堪へる時の如き)或は消魂大悅の爲めに實際無痛アナルゲシの状態が起るのである。即ち此くの如くにして、他の感覺と痛覺との關係が全く同様になる。即ち痛覺は情調といふものを有せずして、たゞ一の性質を有し、此の性質は「痛」といふ語によつて云ひ現はさるゝのである。

こゝに一見例外とも思はれるやうなのは輕き刺衝感覺(Schmerzempfindung)である。之れは皮膚に起つても痛覺を伴はない。然るに其の刺戟の度が強くなると痛くなるから、トゥムベルグは之れをやはり痛覺の中に入れて居る。エッピンゲハウスは此の事を以て痛覺にもやはり感覺と感情との間に差があるといふことの例として居り、

此の感覺の固有の性質は即ち刺衝(Stich)であると考へ、皮膚に溫度感覺、壓覺の外に痛覺があるとするよりも、むしろ刺衝感覺があるとすべきであると云つて居る。但ストウムプは此刺衝感覺はむしろ壓覺なりとした方がよいと考へ、更に進んで、此くの如く兩者のいづれに屬せしむべきかの不明なる感覺のあることは、他にも例のあることとて、例へば味覺と嗅覺、溫度感覺と觸覺との如き是であるといひ、此くの如き感覺のあるといふことは決して彼れの主張する情覺の説の妨げとなるものでなく、此等の情覺が他の感覺を明かに分離されて存在するか否かといふ事が、こゝに問題となるのでは無く、たゞ痛覺が色彩感覺や嗅覺などと同様に、純粹の感覺の性質として存在するといふことが大切なのであるとして居る。

次に内部刺戟から起る痛及び一般の不快感覺は、その成立の仕方についても、亦其の座についても不明なる所が多い。されども今論ずる心理學上の問題に對しては何等の差支は無い。たゞ附帶せる問題として此等の内部刺戟から起る多様の痛が實際は或はそれ自身は同質なもので、たゞ之れと結合せる他の有機感覺又は其の空間上の擴がりの關係から、意識の上に分化して感ぜらるゝのでは無いかといふ問題が起る但しこゝには此事は論じなす。

痛覺に對する感覺は快覺 (Lustempfindungen) で、即ち本能的の受納又は欲求を伴ふ感覺であるが、矢張り同時に痛覺と同じやうな感覺的性質を著しく有して居る。而して亦痛覺と同じく皮膚の刺戟によつて起ることもあり、癢痒、癢笑、及び肉慾の感覺、或は個々の器官又は全身の營養作用によりて起ることもある。之れ等の感覺は情覺の第二の主性質として見るべきもので、丁度溫度感覺に温と冷とのあるが如きである。こゝでも快といふ感覺が悉く同質であるか、或は種々あるかの問題はこゝには論じない。又フオン、フライが特殊の痛神經を認めたやうに、特殊の快神經ありや否やの問題も、生理學者の問題で心理學者は關しない。或は末梢から起つた快覺に對してはかゝる神經があるかも知れないが、身體内部から起つた快覺、例へば飽滿、休息及び全身快感 (allgemeines Wohlbehagen) には、此くの如きものなく、たゞ腦中血行の變化の結果として生ずる或る中樞作用のみによつて起るものであるかも知れぬ。

但こゝに痛と快とを末梢的のものと中樞的のものとを區別したけれども、それはたゞ情覺の中で、特殊の末梢的の刺戟によりて生ぜられ又は變化せらるゝを得べきものと、其の事の不可能なるものがあるといふ丈けの事に過ぎぬ。勿論此の二つ

の場合共に、感覺の實際に成立つこと及び其の感覺の性質に對しては、中樞作用が最も重要なことは當然である。殊に此事が情覺に於いて他の感覺に比して一層然るべきは、痛覺に於いて個人差の極めて多いこと、又中樞的痛覺脱失及び痛覺過敏のあることによつて知らるゝ。

六

次に此等の末梢的及び中樞的の痛及び快の感覺は勿論記憶心像を残す。恰かも色彩感覺と其の記憶心像との關係と全く同様である。感覺と表象との差異を全然異つたものとするか、又はたゞ程度の差とするかは、こゝには無關係である。或は又表象の度が過度に活潑になつた爲めや、或は純生理的作用の爲めに痛みの幻覺の生ずることもある。肉慾感覺に於いても同様である。

然るにキェルペは、前にも述べたやうに此點に於いて感覺と感情との間に重要な差ありとし、之れによつて感覺を特に意識の一獨立要素とする主なる理由として居る。即ち感覺末梢より起つたは常に表象キェルペの中樞的感覚と明白に區別され得るが、感情は、末梢的のものの中樞的のものとの間に何等の差が無いといふのであ

る。

勿論此の點に關しては個人差が多いのであらう。即ち音や臭や色などを隨意に思ひ得る人と得ない人とがあるやうに、情覺をも亦思ひ浮べ得る人と得ない人とがあるのであらう。併しながら若し假りに所謂感情を思ひ浮べることが一般に有らゆる人に於いて不可能であつたとしても、或は反對に、感覺感情が再生せらるゝのみならず、その再生された感覺感情が、有らゆる人に於いて原の感覺感情と區別出來ないものとしても、それでも若し感覺感情が、其の他の諸點に於いて感覺の性質を有して居るならば、之れを一つの新しい精神要素なりと見なさねばならぬ理由は毫もない。何となれば、所謂感覺といふものゝ内に於いて、大體は相似て居りながら矢張り幾分の相異點はあるからである。例へば或る感覺は同時對比をなすが、他の感覺は之をせず、或るものは擴がりを有し、他のものは有しないが如きである。更に感覺と表象との差がたゞ程度の差に過ぎないとする人にとつては、此の點で感覺と感情との區別があるか否かの問題は意味の無い事になる。

こゝにキムルベの擧げた事實の問題に對しては感情といふ語によつてあらはされて居る種々なる現象について別に考へて見ねばならぬ。高等なる感情と感覺感情

とをキユルペは同一の種類のものと見るが、高等なる感情については、キユルペのいふ所の事は真であるかも知れぬ。されどもそれは我々が論じて居ることと無い。我々の論じやうとして居る感覺感情の中で、末梢的の痛及び快の感覺については、内省上キユルペのいふ所と異つて居るやうである。即ち物に刺された痛み (*Stichschmerz*) を思ひ浮べることは可能であつて、丁度我々が色や音を思ひ浮べると同じ意味の再生表象の性質を有つて居る。次ぎに臭氣や色などに伴ふ快不快の感は、之れを臭氣や色そのものに附屬する屬性と見なす學者でも、此等の感情の性質を末梢刺戟なしに表象し得ると考へて居る。何となれば此等の人の考によれば、一つの香ひ一つの色を其の感情の屬性なしに表象するといふことは全く不可能であるからである。故に一つの色が思ひ浮べらるれば、同時に感情要素も亦思ひ浮べられねばならないのである。實際此の場合にはストウムプ自身にとつては、感情の性質のみを別々に表象することは甚困難で或は不可能のやうに思ふが、併し其の他に於いては此の情覺表象例へば或る音樂に伴ふ情や、或はベックリシの畫に伴ふ情の如きは、甚明かであり、さきくと感ぜらるゝ。

キユルペは恰かも此の點を以て自分の考への證據として居る。即ち單に思ひ浮べ

たる香や音や色に結合するものは、單なる感情の表象でなくして、現在の感情である。即ち此の感情は現在に情覺となつて生じて居る香や色や音に結合して居る感情と何等異つたものでは無いといふのである。併しながらストップの考へによれば、思ひ浮べたる香や音や色に結合するものは矢張り情覺表象(Gefühlsinsvorstellung)なのであるが、併しそれが容易く變じて實際の情覺に移行するのである。換言すれば、末梢的に生じた感情(皮膚の痛みなどの如き)の表象に於いては、幻覺といふものは滅多には起らないが、情覺表象の場合には極めて容易く幻覺を生ずるのである。例へば或る人の聲を思ひ浮べると、此の時の情覺の性質は甚だ著しくして、恰かも實際其の人の聲を聞いた時の如くなるが、その聲の性質そのものは單に表象の性質しか有しないが如きである。此の差は、後に述べる如く、香や味や色や音などに伴ふ情覺そのものが既に全く中樞的に支配せられ、末梢的には支配せらるゝことの無いこと、關係して居る。(未完)